

しょう 遠藤尚の 新たなる 挑戦



— Aim at the Top —

今年三月に開催されたFIS（国際スキー連盟）フリースタイルスキー世界選手権猪苗代大会
上村愛子の2冠を筆頭に
日本勢の活躍に沸く陰で
一人悔しさをかみしめる選手がいた
日本モーグル界次代のエース
猪苗代出身の遠藤尚
誰よりも地元での大会の出場にこだわり
その活躍を夢見ていた
あれから三ヵ月
苦しみもがいた中から新たな一歩を踏み出し
世界の頂点を目指すことと仕事の両立という
大きな目標を胸に
遠藤尚、十八才の挑戦が始まった

第一章 過去からの脱却

惜しくも 代表落選 厳しい現実

世界選手権猪苗代大会に出場する日本代表選手四人は、〇八―〇九シーズンのW杯カナダ大会までの合計ポイントと、過去の実績で選出されたカナダ大会終了後、代表入りが決まったのは三人。チームリステルの先輩である附田雄剛、上野修と西伸幸（白馬クラブ）だった。残るもう一枠は、二大会後に持ち越されたこの段階で、遠藤は日本人四位の成績を残していた。代表の座をつかみかけていた。残る二戦、遠藤は全力を尽くす。しかし、惜しくも落選しなかった。地元猪苗代での世界選手権絶対に出場したいと、数年前

から準備をしてきただけに、悔しさはひとしお。大会では前走を務めることになったが、その時の心境をこう語る。「出場する日本人選手よりもいいポイントを出したい。代表チーム関係者も来るので、頑張ろうと気持ちを切り替えました。でも、スタート地点に立つと、大歓声が聞こえてくる。夢にまで見た世界選手権。選手としてこの場に立ってないと思うと、何とも言えない気持ちになりました」。夢舞台での前走は、いつもの遠藤ではなく、明らかに精彩を欠いていた。

J・L・ブラッサールに 憧れて

遠藤は三歳の時、両親の仕事の関係で猪苗代に引っ越してきた。そのころは普通の子どもで、モーグル選手になる

とは思ってもしなかった。自転車が好きで、家の近所や野山を駆け回っていた。とにかく、自転車に乗っていけばご機嫌だった。冬になればスキーを楽しむ、この町ではどこにでもいる少年だった。

運命の出会いは小学校四年生の時。リステルスキーファウンタジアで開催されたW杯。ダフイーコースを稲妻のように滑り降りるカナダのジャン・リュック・ブラッサール（リレハンメル五輪金メダリスト）を見て、モーグルのとりこになった。五年生の冬、兄夏樹と共にチームリステルジュニアに入団。トレーニングを積み、中学生になるとリステルで開催されるW杯の前走を務めるほどに成長した。中学卒業後、猪苗代高校に進み、スキー部へ入部。高校の大会で入賞を重ね、ついにナショナルチーム入りを果たす。世界を転戦し、世界選手権日本代表の座を争うまでに成長した。

悔しさを バネにして 再出発

世界選手権が終わり、長野



遠藤 尚
Sho Endo

Profile えんどう・しょう 猪苗代町渋谷出身
1990年千葉県船橋市生まれ。小学校5年生からチームリステルジュニアに所属しモーグルを始める。
猪苗代高校スキー部時代にはSAJ（全日本スキー連盟）ナショナルチームでJr-Aランクに指定される。
昨シーズンからは日本代表としてW杯に出場、世界を転戦する。高校生最後の年、JOCジュニアオリンピックカップ第9回全国スキージュニア競技会兼2009年全日本ジュニアスキー選手権大会モーグル競技で3冠を達成。178㌢、71㌔。趣味はバスフィッシング

県白馬で開催された全日本選手権に行くと、多くの人から励ましの声をかけられた。「大会に出られなくて良かったとは思わないけど、出られなかったから感じたものとか、変わったこともあったと思う。今回出られなくても、それを励みにして頑張ることとか。正直、大会直後はスキーもしたくないぐらいでした。だけど、だんだん気持ちがあがってきになってきて、今回の落選をバネに頑張ろうと思えるようになってきました」。全日本選手権ではシングルモーグルが二位、デュアルモーグルが四位という成績を

取め、シーズンの最後に開催されたJOCジュニアオリンピックカップ第九回全国スキージュニア競技会兼二〇〇九年全日本ジュニアスキー選手権大会モーグル競技では、学年別、高校男子、総合の三冠を達成し、あらためてその実力を証明した。「日本の代表としてW杯に出て世界を転戦している立場ですから、国内の高校生を相手に簡単に負けるわけにはいかないです」。遠藤の持つ負けん気と責任感が顔をのぞかせた。もう、世界選手権の時の遠藤はいなくなつた。

第二章

新天地を求めて

プロとしてスキーのトレーニングを続けていくだけでも大変な時期に、所属を替え、就職して、仕事をしながらさらなる上達を目指す。あえて新たな挑戦をするその理由とは

もう一つの決意 社会人として大人として

それが中村忍社長だった。

忍建設

スキー部設立

新たなスタート

子どものころから慣れ親しんだチームリステルを離れ、新たな所属チームを探した。環境を変えれば今よりも大変なことも、いいこともあるかもしれない。恵まれた今の環境から離れたくない気持ちも全く無いと言えよう。悩んだ末に出した結論は、仕事をしながらスキーができるチーム。遠征費用など、お金の負担もこれからは増えてくる。スキーをやめた後の人生を考えたら仕事も覚えたい。仕事もしっかりして、スキーと両立させようというものだった。

モーグル選手である中村社長（以下 中村）のもとには、よくモーグルの選手やコーチが入り込んでいる。遠藤が子どものころにゲレンデで知り合ってから親交があり、遠藤の兄夏樹もアルバイトに行くなど、家族ぐるみの付き合いもあった。

中村は、「初めてのことでお互いに手探りでやっていくことになるけれど自分でよければ力になろう」と遠藤の申

し出を受け入れ、忍建設スキー部の創部を決めた。

中村には、自分なりのチーム作りの戦略があった。

自分たちで営業をし、遠藤の魅力やキャラクターを気に入ってもらえればスポンサーやファンを増やせると確信し、スキー部の活動を開始した。

小さいチームでもやれるというモデルケースになりたい、

スキー部というより自分と遠藤の活動を見てほしい。二人の足で稼ぐ活動が始まった。成果はすぐに現れ、仙台では後援会ができた。

「モーグルキャンプも開催しよう。一万円でもいいから遠征費に回そうと話し合いました。その時は儲けがなくても、スポンサーになってくれる人が見つかったり、顔が売れたりする。動かなかつたら



遠藤尚 SHO ENDO

ゼロのままじゃないか」企業側がわざわざ、ウチがスポンサーになりますよという時代ではない。自分たちで動くことが大切なんだと中村は語る。「日本のプロ野球で最高レベルの選手五人といったら、他人に寄付をしたり、球団を作ったりするくらい。」

遠藤は日本男子モーグルで間違いなく五本の指に入る選手。でもスポンサー探しに苦

世界的な不況の中、日本では企業のスポーツ部門撤退が相次いでいる。なぜこの時期にスキー部なのか。なぜ遠藤尚なのか。

株式会社忍建設代表取締役であり、忍建設スキー部監督でもある中村忍社長に聞いた。

なぜ今スキー部を――

創部を決めた時も、これからはわかっていきたし、尚君がただ知り合いだから引き受けたわけでもない。この家族とは初めて会ったときから何か縁があるんだなと思っていました。彼のモーグルにかける熱意も伝わっていたし、俺も手探りで始めるからそれでよければ一緒にやってみようかと忍建設スキー部を設立しました。尚君と一緒に仕事もい

遠藤選手の――

仕事ぶりはどうですか――

昔からモーグルのトップ選手たちの仕事ぶりを見ていたので仕事は速く覚えるだろうと思っていました。一生懸命

やるし、興味を持って仕事をしているので、モーグル選手でなくてもすぐにいい職人になれます。

与えられた仕事はきっちりやるし、ここまで来る選手なので時間の使い方が上手。無駄がないし、尚君だけじゃなくトップクラスのスポーツ選手はやり直しか振り返る仕事はあまり無い。きちっとメモをとっていたりとか。一回失敗したら次は失敗しないです。十八才にしてはしっかりして、たまに仕事のこと

でも言い負かされたりします。私が勝てるのは腕相撲とバス釣りくらいかな（笑）（遠藤：僕の方がうまいです）

――遠藤選手をどんな選手に育てたいですか――

彼にはヤンネ・ラハテラ（フィンランド ソルトレーク五輪金メダリスト・現全日本ナショナルチームコーチ）のような、常勝の選手になってほしい。常に優勝に絡むような選手になれると思っています。これからのモーグル界を牽引していく、日本の代表選手なので、宝物を預かっていると思って大事に伸ばしていきたいです。

労しなければならぬ。同じ超人レベルのトップアスリートなのに、この差ってなんか違うんじゃないかと。プロ野球には、それを支えてきた歴史や人気があるから、スポンサーもつきやすいし、収入にも結びついている。

モーグル界は、そのあたりがまだまだ未成熟です。だから自分たちが歴史を作っていく。そのさきがけになればという思いでやっています」と力強く語った。

遠藤が下宿している中村社長のお宅は7人家族。右側が由香夫人と三女の結ちゃん（2才）。子どもたちもちゃんと僕になれてくれましたと遠藤は笑う



中村忍

SHINOBU NAKAMURA



Interview

Profile なかむら・しのぶ
1968年神奈川県横須賀市生まれ。
株式会社忍建設代表取締役。
平成9年宮城県名取市で有限会社忍建設開業。
型枠大工工事業として県内のみならず福島県、山形県でも事業に着手。20年7月には株式会社忍建設に社名変更。21年4月からは、株式会社忍建設スキー部を創設。スキー部監督も兼ねる現役モーグル選手である。

第二章 五輪を目指して



フリースタイル・モーグル国内合宿は5月31日～6月11日、リステルスキーファンタジアで開催された。写真はトランポリンで空中バランスを確かめる遠藤選手。右下で見つめるのはエアリアルエアーリアルの日本代表 田原直哉選手。

仕事と トレーニングの 充実した毎日

現在、遠藤は社長宅の二階に下宿して生活している。社長の家族と一緒に奥さんが作ったご飯を食べ、家族のように暮らしている。

午前中は仕事の時間。現場に出て型枠を組んだり、資材の発注などを手がける。

午後はトレーニングの時間。近所を走ったり、階段を使ったり、トレーニングをしたり、ジムトレーニングも始めたところだという。

仕事をしながらということ、トレーニング不足の不安はないかと尋ねると、不安はまったく無いと答える。

「むしろやりすぎて練習の質が低下したり、練習自体がストレスになったりするの嫌なんです。精神的、肉体的に追い詰められないように休みを入れたりして、週末にはウォータージャンプに集中するとか、うまく調整してやれていると思います。今なら絶対負ける気はしません。それだけやれていますから」と遠藤は自信を持って答える。

「揺ぎない自信をもって練習できていると思います。今年はおリンピックイヤーですから目標は五輪。優勝できるんじゃないかって本気で思っていますよ。ただケガだけではないように気をつけてほしい。二、三年棒に振っちゃうこともあるから注意してほしいですね」中村は遠藤を心配しながらも自信をのぞかせた。

リステルへ 猪苗代へ 県連への感謝

宮城に所属が移った話になると、必ず遠藤から出てくる言葉があった。地元への感謝。「リステルと猪苗代、そして福島県スキー連盟には本当に感謝しています。小学生にあれだけの施設を使わせてくれるというのは、ほかの県の選手にはない環境。家に帰って、すぐリステルに行けば練習する時間がいっぱいあって、いろいろな選手がいて。リステルの会長（鈴木長治相談役）や社長がいなかったらモーグルをやっていたかもしれない。リステルにウォータージャンプがあったり、W杯を開催

したりしているから子どもたちが見に行つて憧れる。僕の基礎を作ったのはリステルだとはっきり言いたいですね。最後に恩返しができるのはそこだから。すごい成績を出して、最後にリステルのおかげだつて言いたいですね」

五輪へ 遠藤の反省と 決意

世界選手権が終わって今になつて思えることがある。五輪じゃなくて本当に良かった。去年が五輪だったら僕は出れなかったかもしれない。そうじゃなくてよかった。

このチャンスは落とせない

エアに関してはすごい自信があります。世界でも負ける気はしないし、特別に変わったことをする必要はない。スピードとターンを工夫して、昨年と同じ失敗を繰り返さないように五輪シーズンを迎えたいです。

もう誰にも負けたくない



01 記者の質問に丁寧に答える遠藤選手 02 ウォータージャンプのスタート前。緊張感と集中力が高まる 03 ファンの女性にサービス。かと思えば、取材陣を爆笑させたシャラポフ（西伸幸選手）の着替えを手伝う遠藤選手
(6月1日 フリースタイル・モーグル国内合宿の様子)

Interview

全日本フリースタイルチーム 高野弥寸志 やすし ヘッドコーチ

遠藤選手の強みは、若くてフレッシュなパワーで、勢いのある滑りができること。ジャンプも正確で大きい。基本的なスキー操作を覚えてターンを上達させれば、もっとレベルが上がります。これからが非常に楽しみな、期待の持てる選手です。



不況だ不景気だと騒がれ、仕事もなく厳しい世の中だと言われているが、彼は仕事を見つけた。ただ食べていくための仕事ではない。
将来を見据えた上で、しっかりと考え、夢である世界を狙うことが可能な仕事を見つけたのだ。

わたしたちはそんな努力を常日頃しているか。不平不満を口にしながら、自らは動くこともしないか、ただあきらめていないか。

将来のことや、夢だけではない。何かを成し遂げたいという目標に向かって考え、努力することも同じ。

町も財政的に厳しい中で、これからのまちづくりについてしっかりと考え、将来を見据え、二十年、三十年先のことを考えた施策をしていかなければならない。

夢を持ちつらい時代。自らの思い描く夢に向かって、前向きに努力し続ける遠藤尚の姿は、同年代の若者にとっても、けでなく、われわれにも見習うべきところが多い。

わたしたち町民みんな夢に向かって頑張ろうとしている若者を応援していこう

彼のこれからの活躍を期待してやまない。

特集 遠藤尚の新たな挑戦 終わり

有言実行

"I'm a doer, not a talker!"

